

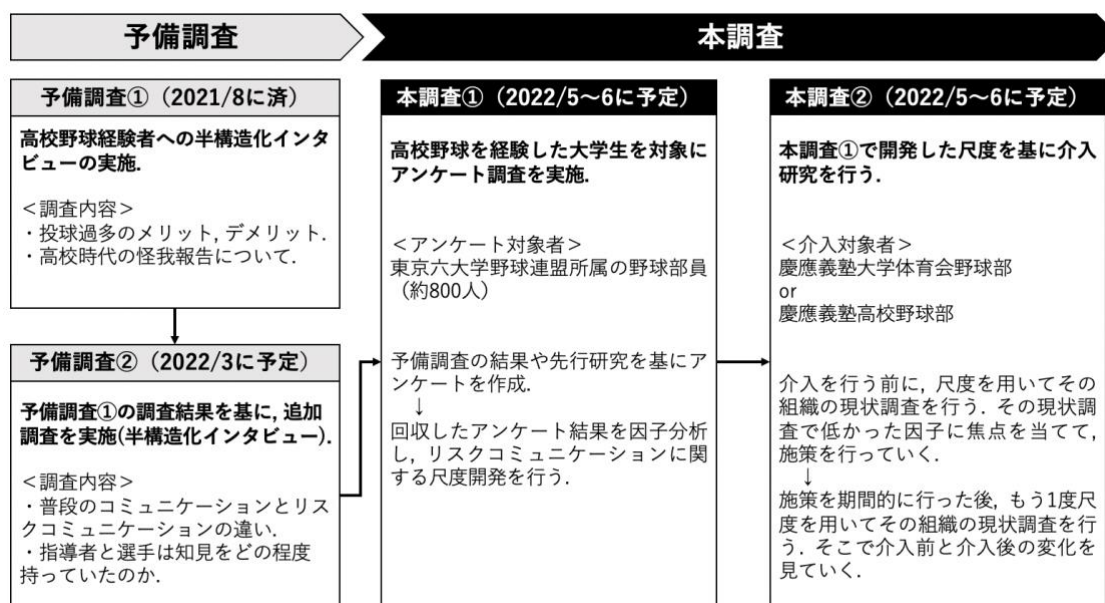
1. 研究目的.

本研究の目的は、高校野球の指導者と選手の関係性を調査し、より良いリスクコミュニケーションを行うための要因の解明を行うことである。現在高野連が行っている対策だけでは、投手の怪我を防ぐには不十分である。そこで本研究の主であるリスクコミュニケーションを、投手の怪我を防ぐ新たなアプローチ方法として提示していきたい。また、このリスクコミュニケーションを提示すると同時に、指導者と選手の関係性を見直す一つのきっかけとなるようにしていきたい。

2. 研究計画.

本研究の計画図は以下の通りである。

図1 研究計画図



予備調査①では、高校野球を経験し、競技実績を残した大学生や社会人に半構造化インタビューを実施した。予備調査②では、予備調査①から出た問題を調査するために、追加調査を行っていく予定である。この予備調査①、②の分析結果と先行研究を基に、アンケートの作成を行っていく。アンケートを作成した後に、高校野球を経験した大学生にアンケート調査を実施していく。アンケート回収後、因子分析を行い、より良いリスクコミュニケーションを行うために必要な要因を抽出し、尺度開発を行っていく。尺度が開発された後に、そ

の尺度を用いて介入研究を行っていく。介入前に対象となる組織に開発した尺度に関するアンケートを実施し、組織の現状のリスクコミュニケーションを数値化する。そこで低かった要因を解決するために、施策を提案し、期間的に行っていく。介入終了後、介入前に行ったアンケートをもう一度実施する。介入前と介入後で数値がどのように変化したのかを見ていき、その施策の効果を考察していく。

3. 予備調査.

5-1. 予備調査の研究対象の概要.

私は予備調査として、高校野球を経験し、大学野球や社会人野球で活躍している投手 11 名に半構造化インタビューを実施した。対象者の選定基準は野球の競技歴が 10 年以上で、高校時代の競技実績が都道府県大会ベスト 4 以上の人とした。高校生を対象とせず、大学生や社会人を選定した理由として、高校野球を 3 年間やり切った大学生や社会人の方が現役高校生よりも高校野球の実態を把握できていると考えたからである。そして、高校時代の競技実績も選定基準として設けた。高校時代の競技実績を選定基準として設けた理由として、試合で勝ち進んでなければ、投球過多のリスクを経験していないと考えてたからである。また、私立高校と公立高校で人数に隔たりが出て、意見に偏りが出ないように、私立高校出身 6 名、公立高校出身 5 名とした。

表 1 インタビュー対象者の内訳.

	年齢	競技歴 (年)	競技レベル (現在)	競技実績 (高校)	私立or公立
A	20	14	大学野球	甲子園出場	公
B	20	14	大学野球	甲子園出場	公
C	23	11	社会人野球	甲子園出場	私
D	23	14	社会人野球	甲子園出場	私
E	21	10	大学野球	甲子園出場	公
F	21	15	大学野球	甲子園出場	私
G	23	16	社会人野球	予選大会ベスト 4	公
H	22	14	大学野球	甲子園出場	私
I	20	14	大学野球	予選大会ベスト 4 以上	私
J	21	15	大学野球	予選大会決勝進出	公
k	20	15	社会人野球	予選大会ベスト 4	私

今回のインタビュー内容は大きく分けて 2 つのことについて質問を行った。1 つは「投球過多についての意見」、そしてもう 1 つは「高校時代の怪我報告の現状」である。この 2 つのことを中心に以下の質問項目を設定し、半構造化インタビューを行った。分析方法は「投球過多についての意見」は帰納的テーマティックアナリシス法を用いて、「高校時代の怪我報告の現状」は M-GTA を用いて分析を行った。最初から設定していたインタビューの質問項目は以下のとおりである。

<インタビュー質問項目>

1. 自分の所属していたチームの雰囲気はどうだったか.
2. 指導者と選手の関係性はどうか.
3. チームの目標.
4. 投球過多についての意見.
5. 投球過多のリスクについてどう思うか. (デメリット)
6. 投球過多の挑戦的意義についてどう思うか. (メリット)
7. 練習の中での投球数
8. 投球数制限についての意見.
9. 怪我報告はどのように行っていたか
10. 指導者への報告は行っていたか (報告する時に不安はなかったか) .
11. 専属トレーナーやチームドクターはいたか.
12. 投球過多の賛成反対意見.

5-2. 調査結果.

5-2-1. 投球過多についての意見.

まずは、「投球過多についての意見」の内容について帰納的テーマティックアナリシス法を用いて行った分析結果を以下に示していく. まずはデメリットについての分析結果を以下に示していく. 投球過多のデメリットは、「怪我・故障」, 「投手の成長機会 (試合)」, 「パフォーマンス向上の阻害 (練習)」の3つのテーマと, 「怪我・故障」の中で, 「選手生命」, 「試合中の怪我」, 「練習中の怪我」3つのサブテーマを抽出することができた.

表2 投球過多のデメリット.

テーマ	サブテーマ	逐語録	語り
怪我・故障	選手生命	L20A・L21A	選手の選手生命に関わるし、そこで野球人生を終わらせていいのかと思う。
		L18B～L20B	大学野球をやっている周りの選手が肘の手術をしていると思うのが、一度怪我をするとその後の野球人生に影響してしまうことだ。...例えば、一度肘を怪我してしまうと、肘をかばってプレーしてしまう。完治したとしても、それ以上に長引くものがあると思う。
		L24C・L25C	投球過多は1人飛び抜けた存在を潰してしまう可能性がある
		L14G・L15G	怪我故障が一番、ボールを投げるという動作が体に悪いことを認識していない。痛みがない状態で投げられる人は本当に少ない。
		L19C・L20C	試合の中で高負荷の状態で投げ続けることで身体が耐えられなくなり、怪我をしてしまう。
	L28J・L29J	相手がいると自分でコントロールできない。自分で100球投げるときと試合で100球投げる時では自分の感覚でやめられない時があるのがデメリットだと思う。	
	練習中の怪我	L21C～L24C	練習の中で、指導者にやれと言われたら断れないこと。身体のどこかが痛くてもやるしかない状況になっていた。結果として、やらせざるにやられ、投球過多を引き起こして怪我をしてしまう。実際に投球過多が今につながっているとは感じていない。練習中の投球過多は少ない
		L10F・L11F	あとは怪我のリスクがある。投球スキルを上げる上で、怪我しないために投げ込む必要はないと思う。
		L24C～L26C	また、投球過多は1人飛び抜けた存在を潰してしまう可能性があるのに加えて、他の選手が出られない可能性がある。高校野球は多くの人にやってほしいから、そういった面でもデメリットになると思う。
		L9D・L10D	怪我のリスクが高くなることと他の投手が成長しづらいこと。1人の投手に負担がかかって、他の投手が公式戦を経験できなくて成長する機会がない。
L16G・L17G		1人が投げすぎることによって他の人が投げることが無いといった経験の差が生まれる。高校野球は教育の場のため皆に平等に機会を与え、野球をさせてあげるべきだと思う。	
パフォーマンス向上の阻害(練習)	L16E～L19E	楽をするということの裏返しで自分のベストパフォーマンスを向上させる練習ではなく自分の投げる量や一週間投げる量が前提で練習してしまうことが、パフォーマンスの向上を阻害する原因になると思う。	
	L9F・L10F	投げ込みをして、毎回肩肘に疲労が溜まった状態だと、自分の肩肘の状態が悪いことに慣れてしまう。その状態の出力での投球を覚えてしまう。	
	L16H～L18H	パフォーマンスを上げるためのピッチングだと思う。高いレベルにパフォーマンスを持っていくためにはある程度自分のそれぞれにあったような投球頻度や回数を設定するべきだと思う。	
	L9I・L10I	投げ続けることによってよかったフォームがだんだん崩れてしまうといったデメリットもある。	
	L16J～L20J	本来であったらフォームにも焦点を当ててやらなくてはならないと思う。大学に入ったらそのような練習をして化ける選手がいると思うが、高校野球はある程度敷かれたレール通りに投げ込んである程度のところまで成長する。しかし、ポテンシャルがある選手は出てくるけど、ポテンシャルがない選手は出てこない。	

「怪我・故障」では、「怪我故障が一番、ボールを投げるという動作が体に悪いことを認識していない。痛みがない状態で投げられる人は本当に少ない。」、「試合の中で高負荷の状態

で投げ続けることで身体が耐えられなくなり、怪我をしてしまう。」という語りがあるように、投げるという動作の負担が大きく、怪我のリスクが高いことが述べられた。先ほど紹介した柳澤ら（2000）、平井ら（2003）、（2010）、青柳ら（2009）、酒折ら（2018）の研究結果にもあるように、投げ続けることで運動能力が低下し、怪我のリスクが高まっていくことは対象者の語りからも示された。また、「試合中の怪我」のテーマのなかで、「相手がいると自分でコントロールできない。自分で100球投げるときと試合で100球投げる時では自分の感覚でやめられない時があるのがデメリットだと思う。」という語りがあった。相手打者との対戦の中で痛みを感じていても、試合は続いている状況であり、すぐに試合を切り上げたり、痛みをすぐに指導者に申告することは難しい。試合という興奮状態の中では、なかなか自分で球数を制御することは難しいことがわかった。また、試合展開やチーム状況次第では、なかなか球数を自分で制御することが難しい。試合中では自分が予想している以上に球数を投げてしまう可能性があることがわかった。「投手の成長機会(試合)」では、「投球過多は1人飛び抜けた存在を潰してしまう可能性があるのに加えて、他の選手が出られない可能性がある。高校野球は多くの人にやってほしいから、そういった面でも

デメリットになる”，“怪我のリスクが高くなることと他の投手が成長しづらいこと，1人の投手に負担がかかって，他の投手が公式戦を経験できなくて成長する機会がない．”，“1人が投げすぎることによって他の人が投げる事が無いといった経験の差が生まれる．高校野球は教育の場のため皆に平等に機会を与え，野球をさせてあげるべきだと思う．”という語りがあった．1人の投手が投げ続けることで，他の投手の出場機会が減り，成長する機会が与えられないことが問題として挙げられた．石村（2020）で示されている通り，日本高野連の会長が，「一人で投げ抜くエースを周囲が支える」というような戦い方を高校野球のお手本として称えている．この戦い方が日本の高校野球のお手本として全国に示されているため，一人で投げ続ける投手が多く存在してしまっているのかもしれない．高校野球はアマチュアスポーツであり，学生スポーツである．選手の安全・健康が第一であり，教育の場として人材育成を行うことが大事である．高校野球の場を野球を通じた人材育成の場と考えた時に，投手の安全・健康を考慮して，1人の投手が投げ続けるのではなく，多くの投手が試合に出場することも重要になってくる．「パフォーマンスの阻害（練習）」では，練習での投げ込みについて多く述べられていた．投手の練習メニューで，「投げ込み」という練習メニューがある．この「投げ込み」のメリットとして，投げる体力の向上や，投球動作の無駄な動きを無くすことや身体全体を使って投げるといった投球動作の技術獲得などが期待されている．しかし，対象者からはこの「投げ込み」のデメリットとして，“楽をするということの裏返しで自分のベストパフォーマンスを向上させる練習ではなく自分の投げる量や一週間投げる事が前提で練習してしまうことが，パフォーマンスの向上を阻害する原因になると思う．”，“投げ込みをして，毎回肩肘に疲労が溜まった状態だと，自分の肩肘の状態が悪いことに慣れてしまう．その状態の出力での投球を覚えてしまう．”というように，自分の最高出力を出すことの阻害につながるという意見があり，“高いレベルにパフォーマンスを持っていくためにはある程度自分のそれぞれにあったような投球頻度や回数を設定するべきだと思う．”というように，自分の身体に適した投球数での練習が重要という意見が出た．他には，投げ続けることで投球フォームが崩れてしまうという意見や，投げ込むことよりも，フォームに焦点を当てて違う練習方法で練習を行うほうが良いという意見が出た．

そして次に，投球過多のメリットについての分析結果を以下に示していく．投球過多のメリットは，「技術の向上（練習）」，「経験値（試合）」，「勝率（試合）」，「進路（試合）」の4つのテーマを抽出することができた．

表3 投球過多のメリット．

テーマ	サブテーマ	逐語録	語り
技術の向上（練習）		L27C～ L29C	・練習などでたくさん投げれば上達するチャンスがあること。投手は単純に投げなければ上手くならない。
		L20E～ L23E	・いろいろな投げ方や感覚をつかむうえではたくさん投げることはいいと思う。必然的に楽に投げるように体が動いていくためそれが意外に良いフォームに繋がることは無きにしても非ずだと思った。
		L18G	・ある程度回数をこなさなくては上手くはならないため、上手くなる可能性はある。
		L19H～ L21H	・何事も反復練習は大事、同じ動作をたくさん繰り返かえすという部分ではじぶんのイメージと実際のパフォーマンスを結び付けていく過程は大事だと思う。投げる数に応じてフォームもイメージと実際の動きがあってくと思う。
		L12I～ L14I	・投げていくことで自分の体も持っている可動域や筋力に適した動きに無意識的に近づいていくことができるのが数を多くするメリット。体力よりも技術的に得るものが大きいと思う。
		L12K	・投げれば投げるほど感覚が上がっていくと思う。
経験値（試合）		L22A～ L25A	・四国大会で学んだことは意外と投げ切れた、やればできると思った。たくさん投げることで、打者との駆け引きや打者の打ち取り方を学ぶことができた。自分の中で試合のペース配分や連投になった時の力の入れ具合や試合後のケアの仕方は勉強になった。試合の中で経験値を得れるということはいいことだと思う。
		L23B～ L26B	・小さい時からずっと試合で投げている分、マウンドでパニックになったりとか、そういうことは経験値に比例しているのではないかと思う。たくさん投げる分、経験値が増えて試合でうまくプレーができるようになる。
		L31J・ L32J	・試合で投げないとわからない感覚があると思うので試合で投げることはよいと思う。練習の投げすぎはよくないが試合で投げるのはよいと思う。
勝率（試合）		L11D～ L12D	・チームの軸となる投手が多く投げることで、監督が試合を計算しやすくなること、試合が進めやすくなること。
		L27C	・1人飛び抜けた存在がいれば試合に勝てるということ。
進路（試合）		L19G・ L20G	・投げたということは注目されているということだと思う。たくさん投げている人は活躍が世間に広まりやすいと思う。

「技術の向上（練習）」では、上記のデメリットのところで述べた投げ込みについてのメリットが語られた。“練習などでたくさん投げれば上達するチャンスがあること。投手は単純に投げなければ上手くならない。”、“何事も反復練習は大事。同じ動作をたくさん繰り返かえすという部分では自分のイメージと実際のパフォーマンスを結び付けていく過程は大事だと思う。”、“投げれば投げるほど感覚が上がっていくと思う。”といった語りがあるように、多く投げることで投球動作や感覚が良くなり、技術の向上が期待されることがわかった。

「経験値（試合）」では、“たくさん投げることで、打者との駆け引きや打者の打ち取り方を学ぶことができた。自分の中で試合のペース配分や連投になった時の力の入れ具合や試合後のケアの仕方は勉強になった。”、“小さい時からずっと試合で投げている分、マウンドでパニックになったりとか、そういうことは経験値に比例しているのではないかと思う。”といった語りを得ることができた。相手がいる試合でしか体験できない打者との駆け引きや打ち取り方を学んだり、試合で経験を積むことで精神的な成長を図ることができることがわかった。「勝率（試合）」では、良い投手が投げ続けることで勝率が上がることが挙げられ、「進路（試合）」では、1人で投げ続けて勝ち進むことで、注目を浴び、活躍が世間に広まりやすいということが挙げられた。近年では、全国での投球過多の問題意識が高まり、球数を多く投げるのが悪いことと思われやすいが、対象者からの語りからも分かるように、球数を多く投げることで得られるものもあり、

5-2-2. 高校時代の怪我報告について.

そして次に「高校時代の怪我報告」の内容について M-GTA を用いて分析を行った結果を以下に示していく.

表4 M-GTA 分析結果.

大カテゴリー	小カテゴリー	逐語録の該当箇所	語り
報告の時期	報告できない・しない	L34E・L35E	・できる限りは投げられない日を作りたくなかったため報告はしなかった。
		L29H	・怪我の報告はできなかった。一番投げさせたといわれていたということはそれなりの期待をされていたとのことなので簡単に投げれませんかと言えなかった。
	重症（身体の限界）	L39C	・監督には完全にプレーができなくなったら報告していた。
		L21F~L23F	・関東大会の時は、きつくて痛み止めを飲んでやっとの状態だったから、その時は報告した。ちょっとした違和感があるくらいでは報告しなかった。
		L22I・L23I	・自分の性格的に無理してでもやりたいということがあったが、よっぽどやばいかもなというときは、やんわり伝えた。
		L20K	・本当に走れない、投げられないなどの状況が生まれた時に伝えていた。
	中症（怪我の前兆）	L20D・L21D	・監督への報告は行っていたと思う。プレーができないわけではないけど、これ以上プレーすると危ないと思った時に報告していた。
		軽症（身体の違和感）	L27A・L28A
	L34G		・違和感を言うことに抵抗はなくすぐに言って治療してもらっていた。
	L36B		・練習中での違和感があるとすぐに報告したり、投球練習を切り上げたりしていた。
L37J~L39J	・怪我した時の報告は普通にしていた。信頼されていたし、信頼もしていた。投手指導していた部長がいたためその部長に言ったりもしていた。僕は立場的に夏の大会に絶対に投げてほしいという感じだったので何かあったらすぐに言えよという感じだった。		
L23K	・やはり2枚目、3枚目のピッチャーは本当に痛むのかというタイミングでも監督に伝えていた。		
報告の仕方	監督への報告	L28A・L29A	・ちょっとした違和感があればすぐに監督に報告して、数日間休養をもらっていた。
		L33B	・監督にすぐに報告していた。
	投手コーチに報告	L37J・L38J	・投手指導していた部長がいたためその部長に言ったりもしていた。
		L19K	・監督には言えなかった部分もある。最初はヘッドコーチやピッチングコーチに伝えていた。
	トレーナーを介して報告	L29E・L30E	・直接指導者ではなくトレーナーの方がいたのでその人にまず伝えやめたほうが良ければ監督に話が行くという流れだった。
	マネージャーを介して報告	L30G・L31G	・マネージャー経由で指導者に報告してた。直接ということもあったが、報告しないとすることはなかった。
怪我の隠蔽/報告の先延ばし	L34E・L35E	・できる限りは投げられない日を作りたくなかったため報告はしなかった。	
	L29H・L30H	・怪我の報告はできなかった。一番投げさせたといわれていたということはそれなりの期待をされていたとのことなので簡単に投げれませんかと言えなかった。	
	L16F・L17F	・言っていたけど、報告を遅らせた。高校2年生の時に、腰が痛いと思っていて、それが腰椎分離症だった。この怪我を報告しないまま、関東大会くらいでようやく報告した。	
	L8C~L11C	・春からメンバーに入っていたが、監督からは経験のために入れたと言われていた。そこからはチームの中心として期待されていて、期待されていた分、厳しく接しられていた。具体的には、「できるまでやれ」「できないなら投げろ」といった昭和なイメージの指導を受けてきた。	
	L1D・L2D	・監督の存在が強くて、選手が萎縮しているチームだった。選手から監督に物を言うことができない雰囲気があった。監督が絶対的な雰囲気があった。	
服従型	期待する選手への厳しい指導	L3E・L4D	・監督は遠い存在だった。大学生がコーチをやってくれていて、その人たちとは親密になっていたと思う。
		L4K~L6K	・1個のミスも許さない怖くて厳しい監督であったが、高校三年生になって信頼関係が深まり、「この人の言うことならしっかり聞こう」と思えるようになった。

服従型+放任型	ノーサイン野球	L5A~L9A	監督はチーム作りの考えが明確で、選手が多少我慢してその考えに合わせるがあった。監督が考えているチームになるように、監督の考えに依っていた。でも、全部監督の考えに従うわけではなかった。自分たちはノーサイン野球をやっている、監督に言われた試合の中で最低限徹底しなければいけないことには従っていた。
	対等な関係性	L3E・L4E	選手から思ったことが指導者に言える。その意見が全部通るわけではないが、選手の意見に対して指導者の方は議論してくれたという点でコミュニケーションが対等であったと思う。
放任型	放任型の指導者	L5G~L7G	監督はあまり言ってくるタイプではなくそっと見守ってくれている人。選手で代表者が話して練習メニューを決めるとそれでいいよという監督だった。
	自己責任の練習	L23I・L24I	自分で考えて練習するスタイルだったので自分で考えた練習で何がをしたら何やってたんだという意見がある。
	自主性を重んじる高校のスタイル	L4J~L9J	野球がへたくそな人がたくさん入ってくるため、そのへたくそな人がどうやったら強いチームに勝てるかということを研究したり調べている先生が顧問だったため信頼してついて行っていた。僕自身は自分なりにいろいろ練習を持ってきたりしていた。そのような自分を尊重してくれるような指導者だった。お互いに意見を言えた。理想の選手像は監督から求められるが、そこへのアプローチの仕方は自分で考えてやるということが高校のスタイルだった。
報告できない要因	当落線上の立場	L30A~L31A	これが私立高校や強豪校で選手の競争が激しくて、結果を残さなければいけない立場に置かれていたら痛くても投げると思う。
		L42C~L44C	他にも投手がいてから、報告したら監督からの評価が下がって自分が使われなくなるという不安もあった。
		L30H~L32H	他に投げる人がいるのか、自分の立場はどうなるのが怖かったためすぐに痛いというのは言いづらかった。期待を裏切ると言うのが怖かった。怒られるということが怖かった。立場への不安が大きかった。
		L40J・L41J	夏を迎えることにフォーカスしていた。信頼が無くなるといった不安は僕はなかったが選手や立場によるかもしれない。ぎりぎりで行っている人だったらわからない。
	投げるしかないチーム状況	L19F~L21F	僕の怪我が発症したのが準々決勝くらいで、そこで外れたら強いチームではなかったため、チーム状況的にも厳しいのではないかと考えた。だから我慢して投げ続けた。チームが勝つために投げたほうがいいかと思った。
	監督の信頼を失う不安	L42C~L44C	どこかが痛いと言った時に監督に報告することが信頼を無くすことにつながると思っている自分がいた。
	監督の反応	L22D・L23D	報告する時に、監督は嫌味を言ってきたり、すんなり容認してくれないのではないかと不安があった。
	自己管理の練習	L21K・L22K	怪我をしたことを伝えた場合には監督に怒られると考えていたため、言わなくてはいけないことは理解していたが、我慢のきく範囲であれば野球を行っていた。
	チームメイトへの裏切り	L23I・L24I	自分で考えて練習するスタイルだったので自分で考えた練習で何がをしたら何やってたんだという意見がある。
	チームメイトへの裏切り	L23I・L25I	・自分で考えて練習するスタイルだったので自分で考えた練習で怪我をしたら何やってたんだという意見がある。チームメイトから言われたこともあり、気にしていた。
エースとしての自覚	L23K~L25K	正直あった。やはり2枚目、3枚目のピッチャーは本当に痛むのかというタイミングでも監督に伝えていた。しかし、そういった状況を見ていると自身は違うという姿を見せなくてはいけないと思っていた。だからこそ、エースとして我慢していた。	
練習できないことの不安	L35E	・監督への報告が嫌だというよりは練習を外れるのが嫌だった。	
報告できる要因	チームの絶対的立場	L30A~L31A	チーム状況として、監督も僕が投げなければ勝ち上がれないことがわかっていて、だから報告はしやすかった。
		L38J~L40J	僕は立場的に夏の大会に絶対に投げてほしいという感じだったので何かあったらすぐに言えよという感じだった。万全な状態で夏を迎えることにフォーカスしていた。
	初期報告の監督の反応	L33B~L38B	監督にすぐに言っていた。周りには監督に隠している選手もいたが、隠していることが監督にバレた時にすごく怒られていた。怪我の初期に言えば怒られることなく、怪我の対応してくれた。怪我をした時は隠すと怒られるので、監督にすぐに報告しないといけないと思っていた。練習中での違和感があるとすぐに報告したり、投球練習を切り上げたりしていた。
	指導者との信頼関係	L37J・L38J	怪我した時の報告は普通にしていた。信頼されていたし、信頼もしていた。投手指導していた部長がいたためその部長に言ったりもしていた。

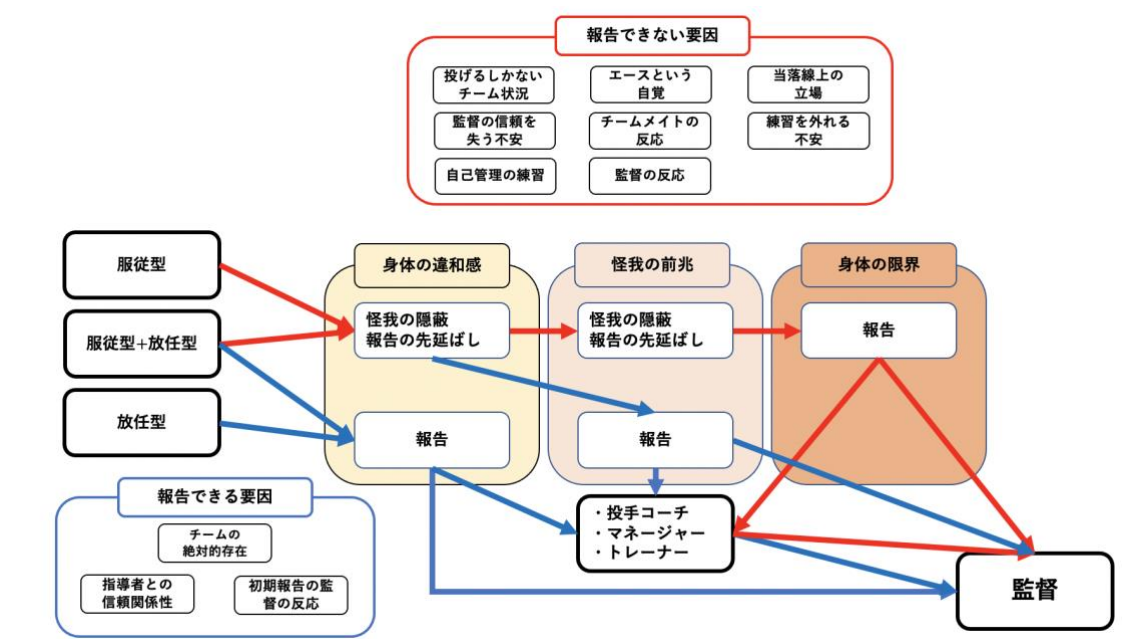
M-GTA の分析の結果、大カテゴリーは 7 個、小カテゴリーは 29 個となった。怪我の報告時期は「報告できない、しない」、「重症（身体の限界）」、「中症（怪我の前兆）」、「軽症（体の違和感）」の大きく分けて 4 つに分類された。違和感がある段階ですぐに報告できる選手もいれば、怪我をしているにもかかわらず、報告しないままプレーをしてしまう選

手もいることが明確になった。報告できる選手は監督への直接の報告ができるのに対して、報告しないままプレーを続ける選手は、監督への直接の報告が行えず、投手コーチやトレーナー、マネージャーを介して報告を行っていた。また最悪の場合には、最後まで報告できず、怪我の隠蔽や報告の先延ばしが行われていた。この背景には、「チーム状況・チームの雰囲気」や「選手心理」が深く関わっていることが確認できた。怪我の隠蔽や報告の先延ばしが起きた要因として、“他にも投手がいて、報告すれば監督からの評価が下がって、自分が使われなくなるという不安もあった”，“他に投げられる人がいるので、自分の立場はどうなるのが怖かったため、すぐに痛いとは言いずらかった”といった「自分自身の立場の不安」や、“僕の怪我が発症したのが準々決勝くらいで、そこで外れたら強いチームではなかったの、チーム状況的にも厳しいのではないかと思った。”といった「投げるしかないチーム状況」，“報告する時に、監督は嫌みを言ってきたり、すんなり容認してくれないのではないかという不安はあった.”，“怪我したことを伝えた場合には監督に怒られると考えていたため、言わなくてはいけないことは理解していたが、我慢の効く範囲であれば野球を行っていた。”という「監督の反応」からくる不安などが挙げられた。そして、今回の分析結果から、チームの雰囲気・環境は「服従型」，“服従型+放任型”，「放任型」の3つに分類された。「服従型」のチームはトップダウン型のチームで、監督が絶対的な存在であり、監督に従わなければいけないという環境が出来上がっている。インタビュー対象者から“監督の存在が強くて、選手が萎縮しているチームだった。選手から監督にももの言うことができない雰囲気があった。”や“監督は遠い存在だった”という語りがあったように、選手から監督に意見を述べることができず、監督が絶対的な権力を持っているという実態が確認できた。今回の調査で「服従型」の報告時期は、「報告できない、しない」，“重症（身体の限界）」での報告が行われており、怪我の隠蔽や報告の先延ばしが起きやすくなっていることがわかった。坂上（2019）は、「非合理的な練習や集団内での上下関係（それによる体罰や暴力）などが肯定されてきたのは、勝利、人間形成、集団の秩序という3つの強力な正当化の論理が存在するからであり、それは戦後、高度経済成長期をへて浸透していったもの」と述べており、野球界でこうしたヒエラルキーの関係性が容認されてきた背景があることがわかる。こうした背景から、服従型のチームが存在していると考えることができる。「服従型+放任型」は、“選手から思ったことが指導者に言える。その意見が全部通るわけではないが、選手の意見に対して指導者の方は議論してくれたという点でコミュニケーションが対等であったと思う。”という語りから分かるように、監督はある程度の権限を行使しているが、選手の考えも尊重し、選手の考えも容認される環境であることがわかった。また、他の対象者の語りでは、「ノーサイン野球」を実践して、チームの決め事はあるが、選手に任せられるところは任せるといった選手に主体性を持たせてチームの運営を行っているチームが存在することが確認された。「運動部活動での指導のガイドライン」（文部科学省、2013）において、指導者には生徒の「主体的に自立して取り組む力」の育成が希求されている。分析結果で出た「服従型+放任型」は、指導者が管理

するところは管理し、選手に主体性を持たせて考えさせている。「服従型+放任型」は選手の主体性を引き出すチームの型になっているのではないかと考える。「放任型」は、「監督はあまり言ってくるタイプではなくそっと見守ってくれている人。選手で代表者が話して練習メニューを決めるとそれでいいよという監督だった。」や、「自分で考えて練習するスタイルだった。」や、「理想の選手像は監督から求められるが、そこへのアプローチの仕方は自分で考えてやるということが高校のスタイルだった。」という語りがあるように、選手たちの自主性を重じて、練習内容などは選手たちに考えさせて任せる環境であることがわかった。今回の傾向として、「服従型+放任型」と「放任型」の報告時期は、「軽症（体の違和感）」、「中症（怪我の前兆）」で報告が行われており、大怪我になる前に報告が行われていることがわかった。

これらのカテゴリーを1つの図としてまとめると以下の図のようになる。

図2 高校野球の怪我報告の実態（M-GTA分析）



この図は、矢印に沿って怪我の報告が行われる。赤い矢印は、報告できない要因が関係して怪我の報告が遅れてしまい、結果として「身体の限界」を迎えてしまう。それに対して青矢印は、「身体の限界」を迎える前までに指導者に報告でき、大怪我になることを防いでいることがわかる。本研究では、この図にある赤矢印が青矢印に変わるためには、どのようなアプローチが必要で、それに対する施策を示していきたい。

4. 今後の予定.

今後の予定としては、まず予備調査を経て、新たに発見した問題についての追加調査を行っていく。新たに発見した問題はコミュニケーションとリスクコミュニケーションの違いについてである。今回の予備調査では、指導者と選手同士で普段からコミュニケーションを取れている人は11人中8人いたのに対して、初期段階の「身体の違和感」で報告できる人は11人中3人だった。

表5 コミュニケーションとリスクコミュニケーションの違い。

	コミュニケーション	怪我報告
A	○	×
B	○	○
C	×	×
D	×	×
E	○	×
F	×	×
G	○	○
H	○	×
I	○	×
J	○	○
K	○	×

このコミュニケーションとリスクコミュニケーションの違いは何が原因なのかを細かく調査していきたい。追加調査の内容は、予備調査で半構造化インタビューを実施した対象者に追加の半構造インタビューを行っていく。また、指導者と選手がどのように知見を得て、決断していたのかも調査していきたい。この追加調査は3月から4月にかけて行なっていく予定である。

5. 参考文献

- ・ 柳澤修, 宮永豊, 白木仁, 下條仁士, 向井直樹, 佃文子, 新津守, 板井悠二,(2000)「高校生投手の投球数増加が身体諸機能に及ぼす影響—いわゆる 100 球肩の検証—」, 『臨床スポーツ医学』.
- ・ 平井大作, 白木仁, 阿江通良, 宮川俊平, 向井直樹, 八十島崇, 宮永豊, (2003)「投球数の増加による上肢及び下肢動作の変容」, 『体力科学 52(6)』.
- ・ 平井大作, 藤井範久, 小池関也, 阿江通良(2010)「野球投手の投球数の増加による下肢関節の力学的仕事量の変化」, 『体力科学 59(2)』.
- ・ 青柳壮志, 川越誠, 赤岩修一, 桜井進一, 福原隆志, 粕山達也, 中澤理恵, 坂本雅昭, 加藤和夫 (2009)「小・中・高校野球選手における肘関節障害の傾向および筋柔軟性の特徴」, 『理学療法学 Supplement』.
- ・ 酒折文武, 圓城寺啓人, 竹森悠渡, 西塚真太郎, 保科架風,(2017)「野球のトラッキングデータに基づいた肘内側側副靭帯損傷の要因解析」, 『統計数理 = Proceedings of the Institute of Statistical Mathematics 65(2)』.

- ・ 深見英一郎, (2017)「運動部活動の運営に対する指導者の考えと生徒の受け止め方の関係」, 『日本体育学会大会予稿集 68(0)』.
- ・ 竹内一郎, 高橋義雄, (2006)「高校生球児の野球留学とキャリア形成の諸課題」, 『生涯学習・キャリア教育研究, 第2号, 39~44頁』.
- ・ 竹村瑞穂, 近藤良享, (2007)「カントの実践哲学からみるフェアプレイの道德性」, 『体育・スポーツ哲学研究 29(2)』.
- ・ 石村広明, (2020), 「「投げすぎ」を肯定する高校野球文化について一球数制限をめぐる言説を手掛かりに一」, 天理大学学报 71(3).
- ・ 坂上康博, (2019), 「スポーツの武士道/武道的変容説の再検討, 拙書『にっぽん野球の系譜学』を中心に」, 『日本体育学会大会予稿集 70(0), 35_2-35_2』.
- ・ 阪長友仁, 「高校球児に伝えたい! ラテンアメリカ式メジャー直結練習法」, 東邦出版.
- ・ 元永知宏, (2020)「野球と暴力 殴らないで強豪校になるために」, イースト・プレス社.